



情報化社会文化論

情報化推進の理論的根拠と社会的位置づけ

常任理事 中川俊男

前号の指標において、北海道医師会における情報化の経緯、進捗状況、今後の方向性などについて述べたが、会員からの「なぜいま、情報化か？」という本質的な疑問に対して、明確な答えを提示することは容易ではない。

「北海道医師会総合情報システムの構築にかかわる委員会」の「作業部会」では、医師会、医師、医療機関に情報化が求められる理論的根拠を示すために、「文化的側面」からの答えを作成したので提示し、会員の皆様からのご意見、ご批判を賜りたい。

IT革命時代における医師会情報化推進

- 情報化推進の社会的位置づけについて -
- 北海道医師会総合情報システムの構築にかかわる委員会作業部会

平成12年8月31日

- 委員長 大内 東（北海道大学工学部教授）
委員 中川 俊男（北海道医師会常任理事）
" 長澤 邦雄（北海道医師会常任理事）
" 宮腰 昭男（札幌大学経営学部教授）
" 栗原 正仁（北海道工業大学電気工学科教授）
" 三田村 保（旭川医科大学医学部助教授）
" 山本 雅人（北海道大学大学院工学研究科助教授）

IT革命

国中を挙げてIT革命に沸いている。IT革命は、第1次の農業技術革命、第2次の内燃機関技術革命に次ぐ第3次の産業革命である。アルビン・トフラーが言う第3の波である。これまでも、IT革命の到来をIT技術者・研究者は、必然のこととし

て認識していたにもかかわらず、日本の政府はほとんど効果的な対応を怠ってきた。アメリカ経済の好調さのみで、遅きながら日本もIT革命を本格的に目指すことになったと思われる。IT革命は、そのインフラ技術であるデジタル技術を基盤にあらゆる社会システムへ制度変革をもたらすであろう。例えば、経済システムにおいては、eビジネスが商取引に大きな革命を起こしつつある。医療システムもまた然りである。医師会はいかにしてIT革命に取り組むべきであろうか。

日本医師会の情報化政策

医療分野特有の事情や将来展望の観点から見た情報化の必要性は、日本医師会医療システム研究委員会においてまとめられた、平成7年度報告書「佐藤一太郎医師などの物語 - 2005年のかかりつけ医 -」に見ることができる。さらに、同委員会の議論を引き継いだ「情報化検討委員会」での検討を経て、平成12年には、「医療情報ネットワーク推進委員会」を立ち上げ、現在は精力的に全国医師会の情報化を進めている。

日医は平成9年4月の坪井執行部の発足を期に、シンクタンクである日医総研を設立し、独自の医療政策案を厚生省案に対峙する形で国民に提示する手法を選択した。この独自の政策立案機能を十分に発揮するためには、全国各地で地域医療を担当する会員からの情報収集と全会員への情報の分散と共有が不可欠となる。前者としては、一般会員から直接日医への電子メールの送信、後者の例としては、15万人の会員メーリングリストを利用した最新医療情報の一斉配信が想定される。

全産業分野において、医療分野の情報化が最も遅れていると指摘されている。平成12年7月現

在、全国医師会のインターネット接続率すなわち情報化率は47都道府県医師会では100%であるが、922の郡市区医師会では約70%に過ぎない。また、約15万人の日医会員の会員向けホームページのアカウント取得率は10%に満たない。これらを他産業分野の企業情報化率が約90%にも達している現状と比較すれば危機感を持たざるを得ない。日医執行部は、平成12年度中における922郡市区医師会の情報化率100%達成を目指しており、さらには情報化の有無にかかわらず全会員へのアカウントの発行も検討中である。

しかしながら、都市医師会の段階では、未だに情報化の必要性を云々する議論が続くべき情報化が進まないでいるのが現状である。これに対して、北海道医師会総合情報システムの構築にかかわる委員会作業部会は、議論を重ねた結果、情報化推進を進めるに当たっての理論的根拠として、情報化を進めなかった場合にいかなる状況に陥るかという逆の視点から議論を進めた。その結論は情報化の必要性に関する社会的な位置づけに基づいて議論を展開することであった。以下では、この論点である社会文化論的観点と医師会情報化の必要性について述べる。

情報ネットワーク

医師会情報化の中核となるのは、明らかに、インターネット技術に支えられた情報ネットワークである。最初に認識しておきたいことは、単に情報ネットワークといっても、10年前と今とでは技術的に全く異なるものであるということである。10年前にネットワークといえばそれはLANすなわちローカル・エリア・ネットワークであり、一方、現在ではそれは明らかにWANすなわちワイド・エリア・ネットワーク、もっとはっきりいえばインターネットのことである。

閉鎖系と開放系

この両者の通信技術上の細かな相違はさておいて、システム論的に最も大きな、そして誰でも理解できる違いは、おのおのの閉鎖性と開放性の違いである。LANは特定の組織内で閉じた系を構成し、あらかじめ規定された人々の間だけでのコミ

ュニケーションを目的とするのに対し、インターネットは組織外の不特定の人々にも開かれたコミュニケーションの場を提供する。すなわち、前者は閉鎖系（closed system）であり、後者は開放系（open system）であると位置付けられる。

その結果、情報ネットワークを導入すべきか否かといった組織内での意思決定の基準も10年前と今とでは自ずと枠組みが変化してきている。LANの時代では自分たちの組織外のことは考慮せずに、自分たちの閉じた世界での価値観を適用できた。通常は、ネットワークを導入した際のコスト・パフォーマンスを数量化したりして、経営的な観点から議論されたものである。しかし、現在のインターネット時代はそうではない。外部との不特定多数の人々との予想もつかないコミュニケーションからコスト・パフォーマンスを定量化して評価するなど不可能である。この時代には文化的な観点から価値観を構成して判断すべきである。すなわち、経営論から文化論へということである。これについて切り口を変えてもう少し述べてみよう。

三種の神器

20数年昔、三種の神器という言葉があった。それはテレビ・冷蔵庫・洗濯機のことであった。ところが今は、パソコン・携帯電話・Eメールアドレスなのである。旧三種の神器と新三種の神器を比較すると、興味ある明白な相違が認められる。旧三種の神器は閉鎖系を構成する単体機器である（テレビは情報機器ではなく、一方的情報伝達機器であり、人々との双方向コミュニケーションを目的としていない。）。それに対して、新三種の神器はいずれも開放系に参加するためのアクセス手段である。

新三種の神器は仕事にばかり使用されているわけではない。私用で友人とのコミュニケーションにも使われ、またホビーの世界でも活躍している。こうなるとやはりこれは文化である。我々の行動様式が変わってきた。文化が大きく変わってきたのである。ビジネスのような閉じた世界だけで何かを判断できる世界ではない。

実はインターネット技術というのは、理科系の

人間からみれば、従来技術の延長上に自然にできたものであって、そこには革命的な技術要素はさして見当たらない。ところが、文化系の人間で社会のオピニオン・リーダーと目される人の中には、これを革命と呼ぶ人もいる。すなわち、IT革命である。その意味は技術革命ではなく、上記の意味での文化革命なのである。

文化

文化というのは一種の多数決原理に基づく。少数の優れた文化人がいるから文化が形成されるのではない。圧倒的多数の一般人が同様な行動様式をとるからである。その場合、その文化を受け入れるか否かは、各個人、各組織の自由である。それを拒否した場合には、社会からの孤立を招くことになる。だからどうなるとは定量的には論じられない。しかし、社会との関わりで行動する個人や組織の場合、自らもこの文化の流れに入っていく選択肢以外には考えられないだろう。

情報リテラシー教育

実際、我が国では、暗黙にはあるが、この流れは肯定的にとらえられているのではないだろうか。最近、文部省は普通高校の指導要領を改正し、2003年度から「情報」という教科を必修教科として導入することを決めている。この科目は、国語、数学、社会、理科、音楽、美術、保健体育、技術家庭、外国語に次ぐ、第10番目の教科である。これは教育史上、最大の変化の一つである。この教科の主要目的の一つは、明らかに、情報ネットワーク文化に適應して生活していくための基礎的な態度と知識および技能、すなわち、情報リテラシーを身につけることにある。再度強調するが、この情報という必修教科を学ぶのは、工業高校や商業高校の学生ではなく、普通高校の学

生なのである。

さて、これからの若い人はこうして学校教育で情報リテラシーを身につけられるが、このようなことを学んできていない社会人はどうすればよいのだろうか。特に、高齢者にとっては、一般にこのような学習に苦勞が伴うものである。このことに関して言えば、行政や教育機関が協力し、意欲のある人に対しては、惜しみなく支援をする体制が整えられることを期待したい。例えば、札幌市では、65歳以上の高齢者を対象とした無料パソコンサークルを開催した。その結果、高齢者が週1回半年にわたってパソコンの操作法を学び、インターネットのホームページを作成するまでに至った。医師会組織においても、このような支援体制を完全に整えるべきである。

オープンシステム・オープンマインド

一方、注意すべきこととして、情報リテラシーを身につけていない人を決して批判したり差別したりすべきではない。いわゆるITデバイドを作ってはならない。開いた心が必要である。情報ネットワークという新しいメディアの出現によって、情報の発信、取得、あるいはネットワーク上での作法など、私たちの行動規範としての倫理も変化している。物理的なネットワークのみを作っても、それを利用する心が間違っていない、魂の入っていない仏のようなものである。オープンシステムの時代に求められる心はオープンマインドということになるだろう。

さて、話を本来の医師会情報化に戻すと、本稿で述べたような認識のもと、医師会関係者の十分なご理解と支援があってはじめて、魂の入ったネットワークを実現することができるものと考えられる。そして、それは単に医師会のみならず私たち国民の文化をおおいに豊かにするに違いない。